キャラクター名
閃崎 吉野

プレイヤー名

シンドローム	エンジェルハィロゥ モルフェウス	ワークス	高校生	カヴァー	高校生
オプショナル	ウロボロス	年齢	17	性別	女
覚醒	無知	衝動	吸血	初期侵食率	37 %
出自	義理の両親	経験	記憶喪失	邂逅	師匠:立科 沙紀

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	1	0			2
感覚	5	0	0			5
精神	1	0	0			1
社会	1	0	0			1

HP	25
行動値	11
(非装備時)	11
戦闘移動	16
全力移動	32

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	9		射撃			ＲＣ	2		交渉		
回避	1		知覚	1		意志	1		調達	5	
運転：			芸術：			知識：			情報：噂話	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
庖丁藤四郎(混沌為る者の槍)	白兵	5r+7		12		2種以上のエフェクト組み合わせ時判定ダイス+5
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
◆一般アイテム	
ウェポンケース	◆エンブレム
コネ:噂好きの友人	相棒(立科 沙紀)
◆ユニークアイテム	
混沌為る者の槍	
◆カスタマイズ	
・ネームド	
・ヒストリー	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 12	残り財産P： 10

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
原初の赤:ﾏﾙﾁｳｪﾎﾟﾝ	1	3	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	白兵		
効果：	武器を二つ使う判定達成値-[5-Lv]							
ｺﾝｾﾝﾄﾚｲﾄ:ﾓﾙﾌｪｳｽ	3	2	ﾒｼﾞｬｰ			ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ		
効果：	いつもの							
カスタマイズ	2	2	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	白兵		
効果：	判定ダイス+Lv							
水晶の剣	2	4	ﾒｼﾞｬｰ	至近	※	自動		
効果：	武器攻撃力+[Lv*2]							
剣精の手	2	2	ｵｰﾄ	至近	自身	自動	ﾘﾐｯﾄ	
効果：	判定ダイス目を10に変更							
天の業物	1	4	ｵｰﾄ	視界	単体	自動	ﾘﾐｯﾄ	
効果：	判定Ｃ値-1(下限5)							
原初の虚:ﾊｲﾌﾞﾘｰﾃﾞｨﾝｸﾞ	1	8	ｵｰﾄ	至近	自身	自動	120	
効果：	ｴﾌｪｸﾄ使用回数回復。その侵蝕と同値のHPを失う							
混色の氾濫	2	4	ﾒｼﾞｬｰ	-	範囲選択	ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ		
効果：	範囲化							
戦いの予感	1	2	ｾｯﾄｱｯﾌﾟ	至近	自身	自動		
効果：	行動値+【Lv*10】							
七色の直感	★							
効果：	感情が見える。							
折り畳み	★							
効果：	刀を隠している。							
効果：								
効果：								

---概要---
義理の父親と暮らす普通の高校生。家は八百屋。店名は『N市飯坂青果店』
レネゲイドの事を知り、世界の情勢などを知ったがよく話が呑み込めず、イリーガルにもならずに今までの生活を続けている。
元来父から「困った人がいたら助けろ」と武士道を説かれており責任感は強いほう。
（心の底では『八百屋が武士道を説くなよ』と思っているが)父の話す武士道とそれにまつわる話は好き。
また、同時に余計な事に巻き込まれたくないという一般的尺度の考え方も持っており、トラブルの気配を察知した時点で鎮火ないし距離を置く動きを取る。
七色の直感を常時展開しておりその場にあった当たり障りのない話し方をする。

---来歴---
元々孤児であり、子の出来なかった両親に養子として迎えられた。
両親が離婚し一度母方について行ったがそこで兄弟が出来た。
可愛い弟だったがそれを期に新しい両親からの扱いが変わった。
母からは「離婚後すぐに子を成しな自分をどう思っているか」という恐怖
新しい父からは「君を自分の子を同じように愛さなければいけない」という責任めいた不自然な愛情表現。
そんな心理的変化が強く感じられるようになってしまった。
きっとお互いに不慣れなだけだった。時間をかければ自然な笑顔をお互い浮かべられた。
でも、私はその空気に耐えれなかった。
そうして家を飛び出し父の元へ戻ったのだ。
今思えばこの時すでにオーヴァードとして覚醒していたのかもしれない。